漢籍逍遥

八月の光――回想の陶淵明――

森まり子

瞻夕欣良讌
離言聿云悲
晨鳥暮來還
懸車斂餘暉
逝止判殊路
旋駕悵遲遲
目送回舟遠
情隨萬化遺

夕を瞻て良讌を欣ぶも
離の言　聿に云に悲し
晨鳥　暮に来り還り
懸車　余暉を斂む
逝くと止まると殊路を判つ
駕を旋らせば悵しくも遅遅たり
回舟の遠ざかるを目送すれば
情は万化に随いて遺る

（「於王撫軍座送客」[一]より）

＊　＊　＊　＊

木の葉のそよぎや陰影は、黄金色に輝く夏から澄んだ秋への移ろいに気付かしめる。木々の葉は、夏至の頃から二か月にもわたり真夏の光のみを反射して、太陽そのもののように輝く。八月の光が薄れる頃、真昼の残暑の日差しがいかに盛夏を錯覚させようと、木々の一葉と一葉の間にかすかな影が宿る。一枚一枚の葉が別の葉の影を映すようになる時、昼間には目立たぬが日が傾くにつれて色濃くなるその陰影に、人は夏の衰えを知る。

少無適俗韻　少きより俗に適うの韻無く
性本愛丘山　性　本と丘山を愛せしに
誤落塵網中　誤って塵網の中に落ち
一去十三年　一たび去りてより十三年（一）
羈鳥戀舊林　羈鳥は旧林を恋い
池魚思故淵　池魚は故淵を思う
開荒南野際　荒を南野の際に開かんと
守拙歸園田　拙を守って園田に帰る
方宅十餘畝　方宅　十余畝
草屋八九間　草屋　八九間
榆柳蔭後簷　榆柳　後簷を蔭い

桃李羅堂前　　桃李　堂前に羅なる
曖曖遠人村　　曖曖たり　遠人の村
依依墟里煙　　依依たり　墟里の煙
狗吠深巷中　　狗は吠ゆ　深巷の中
鷄鳴桑樹巔　　鷄は鳴く　桑樹の巔
戸庭無塵雜　　戸庭　塵雑無く
虚室有餘閒　　虚室　余閒あり
久在樊籠裏　　久しく樊籠の裏に在りしも
復得返自然　　復た自然に返るを得たり

（「歸園田居　其一」）

私が陶淵明と出逢ったのは、八月の光あふれる伊豆においてであった。「園田の居に帰る」冒頭のこの詩は、思春期の入り口に立っていた十二才の私の心をたちまちにして捉えた。父の書棚にあった『中国詩人選集』の陶淵明巻(二)の布製の背表紙に穴があくまで読み、そらんじるまでになった、その詩人との出逢いである。

周囲に自然に置かれていた古色蒼然とした古今東西の多くの文学の中でも、何故とりわけ陶淵明に惹かれたのかは分からない。陶淵明の詩文は、その思索の深さゆえであろうと思われるが、古来多くの中国や日本の文人に愛されてきた。勿論、そのような側面に私も無意識的に惹かれたのであろう。しかし、伊豆

の八月の光の中で陶淵明に惹かれた少女もまた、「少きより俗に適うの韻無く　性本と丘山を愛せし」者であり、そしてその少女が長じた今もそうである事を考えると、「無適俗韻」ゆえに心のどこかで生きづらさを感じていた少女が、自分と同じ種類の人間の感情をいにしえびとの文章に見出して直感的に惹かれた、というのが本当のところであったのだろう。

やがて私は古来日本人がそうであった様に、『古文真宝』『唐詩選』『史記』などに親しみながら漢文の世界に一人分け入っていった。特に『古文真宝』では「歸去來辭」をはじめとする陶淵明の作品のみならず、汨羅に身を投じた屈原、「歓楽極まりて哀情多し」とうたった漢武帝、「先帝業を創めて未だ半ならず して、中道にして崩殂す」と格調高く書き出す「出師表」で今も胸を打つ誠意を吐露した諸葛亮などの古い時代の詩文から、完成された様式美を備える李白・杜甫・白居易などの唐代の詩文、完成の先にある幽玄を感じさせる蘇軾などの宋代の詩文まで、ごく自然に親しんだのである。[四] 李白と杜甫の詩のそれぞれに異なる味わいにも惹かれ、唐代の三大詩人の中では杜甫の詩の陰影ある格調に最も惹かれたが、様式美と精神性は究極的には両立しがたいのであろうか、結局陶淵明を上回って私の心を捉えたものはなかった。しかし今顧みれば、同じ様に感じる文人は過去にもいたのであり、例えば蘇軾の次の陶淵明評には深く共感するものがある。「吾れ詩人に於て甚だ好む所なし、独り淵明の詩を好む。淵明、詩を作ること多からず、然れどもその詩は質にして実は綺、癯せていて実は腴ゆ。曹（植）、劉（楨）、鮑（照）、謝（朓）、李（白）、杜（甫）の諸人、みな及ばざるなり」（『東坡続集』巻三）。李白と杜甫が西洋音楽で言うところの古典派で、「長恨歌」の白居易や「赤壁賦」の蘇軾がロマン派であるとすれば、陶淵明は紛れもなくバロック――一

見理知的でありながら本質は激しいまでの情熱と魂の崇高さを内面に秘めるバロックの詩人であり、私にとっては西洋音楽の作曲家の中でこよなく愛するバッハに匹敵する存在であり続けた。

「少きより俗に適うの韻無く」の詩は、陶淵明が官吏の生活を捨てて田園に帰った感慨をうたった「園田の居に帰る」其一である。(五) 陶淵明の詩集を開いた時の最初の出逢いが鮮烈であったためか、私にとっては今でも、その詩集の冒頭に収められていたこの詩に始まる「園田の居に帰る」五首の連作が、とりわけ思い出深いものとなっている。

次に掲げるのは「園田の居に帰る」其四である。

久去山澤游　久去りし山沢の游び
浪莽林野娛　浪莽たる林野の娛しみ
試攜子姪輩　試みに子姪の輩を携え
披榛歩荒墟　榛を披いて荒墟を歩む
徘徊丘壠間　徘徊す　丘壠の間
依依昔人居　依依たり　昔人の居
井竈有遺處　井竈は遺れる処有り
桑竹殘朽株　桑竹は朽ちたる株を残す
借問採薪者　借問す　薪を採る者よ
此人皆焉如　此の人　皆な焉くに如ける

薪者向我言　　薪者（しんじゃ）　我に向いて言えり
死没無復餘　　死没して復た余（のこ）れるもの無しと
一世異朝市　　一世　朝市を異にす
此語眞不虚　　此の語　真に虚（いつわ）りならず
人生似幻化　　人生は幻化に似て
終當歸空無　　終には当（まさ）に空無に帰すべし

（「歸園田居　其四」）

山野を散歩していて廃屋に行き当たり、薪を採る者に聞いたところ、家人は全員亡くなったというのである。それに対する感懐が「一世異朝市　此語眞不虚　人生似幻化　終當歸空無」の部分である。古代や中世の日本の古典にも親しんでいた中学生の私にとって、「無常観」が日本文化独自のものではないというのは新鮮な発見であった。陶淵明の思想には儒仏道が混在していると言われるが、全体として道教的要素が強く感じられる陶淵明の詩文において、あたかも『平家物語』冒頭を見る様な無常観が表出されている事は、日本文化における道教の影響にもっと注目すべきであるという天心の指摘[六]とも符合すると、今にして思われる。無常観は陶淵明の多くの詩に共通する主題であり、「園田の居に帰る」以外の次の詩にも流れている。

迢迢百尺樓　　迢迢（ちょうちょう）たり　百尺の楼
分明望四荒　　分明に四荒を望む

暮作歸雲宅　暮には帰雲の宅と作り
朝爲飛鳥堂　朝には飛鳥の堂と為る
山河滿目中　山河　目中に満ち
平原獨茫茫　平原　独り茫茫たり
古時功名士　古時　功名の士
慷慨爭此場　慷慨して此の場を争う
一旦百歲後　一旦　百歳の後
相與還北邙　相与に北邙に還る
松柏爲人伐　松柏　人の伐るところと為り
高墳互低昂　高墳　互いに低昂す
頹基無遺主　頹基　遺主無く
遊魂在何方　遊魂　何れの方にか在る
榮華誠足貴　栄華は誠に貴ぶに足るも
亦復可憐傷　亦た復た憐れみ傷む可し

（「擬古　其四」）

この詩は「國破山河在　城春草木深」に通じるものがあり、杜甫が参考にしたのではないかとの想像もよぎる。更に言えばこの詩に流れる無常観は、「春望」を意識して書かれた近世日本の屈指の名文にも、

はるかな歳月を隔てて流れ込んでいるように見える。この詩を読む度に、かの漢文調の、格調高いくだりが抑えがたく脳裏に浮かぶのである。

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高舘にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高舘の下にて大河に落入。康衡等が旧跡は、衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡(七)

古戦場ではないが、一年半前の夏に碓氷峠に登った折、同様の感懐に襲われた事があった。薄曇りで、雲間から差す柔らかな光と霧の中にたゆとい眠るが如く横たわるなだらかな山なみに、名状しがたい無常を感じたのであった。

峠や高楼などから山河を遠望する時、人はなぜか来し方行く末を思い、どこまでも単調に続く穏やかな自然の中に、いずれの人も免れ得ぬ有限の摂理を見る。千載違わざるその情感を、人は「普遍」と呼ぶのであろう。

「園田の居に帰る」に戻りたい。

悵恨　獨策還　　悵恨して独り策つきて還るに

崎嶇歴榛曲　　崎嶇として榛曲を歴たり
山澗清且浅　　山澗　清く且つ浅く
可以濯吾足　　以て吾が足を濯う可し
漉我新熟酒　　我が新たに熟せる酒を漉し
隻鶏招近局　　隻鶏もて近局を招く
日入室中闇　　日入りて室中闇く
荊薪代明燭　　荊薪もて明燭に代う
歓来苦夕短　　歓び来って夕の短きに苦しみ
已復至天旭　　已に復た天旭に至る

（「帰園田居　其五」）

「山澗清且浅　可以濯吾足」が屈原の「漁父辭」を踏まえていると気付いたのは『古文真宝』を読むようになってからであったが、当時屈原にも惹かれていた私は、陶淵明が何か所にもわたり「漁父辭」を間接的に引用している事について、不思議の念に打たれた事を覚えている。例えば、「飲酒　其九」には、「我れの時と乖くを疑う」田父が訪ねて来て陶淵明に「一世皆な同じくするを尚ぶ　願わくは君も其の泥に汨め」と好意から忠告する場面がうたわれる。しかし彼はこう答えるのである。

深感父老言　　深く父老の言に感ずるも
稟氣寡所諧　　稟気　諧う所寡し

紆轡誠可學　轡を紆ぐること誠に学ぶ可きも
違己詎非迷　己に違うは詎ぞ迷いに非ざらんや
且共歡此飲　且く共に此の飲を歡しまん
吾駕不可回　吾が駕は回らす可からず

今から考えれば、相手の好意を穏やかに受け止めながらも節を曲げない精神に、少女の私は、自分の中の似たものを見て共感したのであろう。また陶淵明と私が、時空を超えて屈原に惹かれたのも偶然ではなく、屈原と精神的に共通するものがあったからであろう。

高い志を遂げられず非業の死を遂げたいにしえびとへの、古典を踏まえた格調高い哀惜は、陶淵明の詩の尽きせぬ魅力の一つでもあるが、その絶唱が「荊軻を詠ず」である。

燕丹善養士　燕丹は善く士を養う
志在報强嬴　志は強嬴に報ゆるに在り
招集百夫良　百夫の良を招き集め
歲暮得荊卿　歲暮に荊卿を得たり
君子死知己　君子は己を知るものに死す
提劍出燕京　劍を提げて燕京を出づ
素驥鳴廣陌　素驥　広陌に鳴き
慷慨送我行　慷慨して我が行を送る

雄髪指危冠
猛氣衝長纓
飲餞易水上
四座列羣英
漸離擊悲筑
宋意唱高聲
蕭蕭哀風逝
淡淡寒波生
商音更流涕
羽奏壯士驚
心知去不歸
且有後世名
登車何時顧
飛蓋入秦庭
凌厲越萬里
逶迤過千城
圖窮事自至

雄髪は危冠を指し
猛気は長纓を衝く
飲餞す　易水の上
四座　群英を列ぬ
漸離は悲筑を撃ち
宋意は高声に唱う
蕭蕭として哀風逝き
淡淡として寒波生ず
商音に更々涕を流し
羽奏に壯士驚く
心に知る「去りて帰らざるも
且つは後世の名有らん」と
車に登りては何れの時か顧みん
蓋を飛ばして秦庭に入る
凌厲として万里を越え
逶迤として千城を過ぐ
図窮まって事自ら至る

豪主正怔營　　豪主　正に怔営たり
惜哉劍術疏　　惜しい哉　劍術疏にして
奇功遂不成　　奇功　遂に成らず
其人雖已沒　　其の人　已(すで)に没すと雖も
千載有餘情　　千載　余情有り

（「詠荊軻」）

「風蕭蕭として易水寒し　壯士一たび去って復た還らず」という『史記』の名場面を心に思い浮かべぬ読者は古来いなかったであろう。たれこめる暗雲を夕日が深紅色に燃え立たせるかの如く劇的な『史記』のそのくだりは、無限の情感がこもる簡潔な文体で語られる。

太子及賓客知其事者。皆白衣冠以送之。至易水之上。既祖。取道。高漸離擊筑。荊軻和而歌。爲變徵之聲。士皆垂淚涕泣。又前而爲歌曰。風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。復爲羽聲忼慨。士皆瞋目。髮盡上指冠。於是荊軻就車而去。終已不顧。

（太子及び賓客の其の事を知る者、皆白き衣冠して以てこれを送る。易水の上(ほとり)に至る。既に祖し、道を取らんとす。高漸離、筑を撃ち、荊軻、和して歌う。変徵(へんち)の声(せい)を為す。士、皆涙を垂れて涕泣す。又た前(すす)みて歌を為(つく)りて曰く、

風蕭蕭として易水寒し
壯士一たび去って復た還らず

と。復た羽声を為し、忼慨す。士、皆目を嗔らし、髪尽く上りて冠を指す。是に於て、荊軻、車に就きて去る。終に已に顧みず。

『史記』「刺客列伝」(八)

右の不朽の名文と呼応させつつ、易水のほとりの今生の別れを格調高く描写し直し、「刺客列伝」の他の箇所に見える「士は己を知る者のために死す」を想起させる「君子死知己」や、「心知去不歸　且有後世名」という部分に自らの志をもこめたこの詩が、陶淵明の作品の中で私は最も好きである。志を遂げられなかった荊軻の生涯を自らの人生に重ね合わせた司馬遷の筆によって荊軻は生き続け、後世の陶淵明はその荊軻と、恐らくは司馬遷に、自らの人生を重ね合わせた。そして陶淵明の詩を通じて、改めて荊軻と司馬遷に、また彼らに自らの人生を重ね合わせた陶淵明その人に共感する私が存在するという、時空を隔てた幾重もの懐旧の情がそこには流れている。陶淵明は、司馬遷と同じく荊軻に自身の人生の不条理を重ね合わせつつ、成就するか否かという結果ではなく、人間の志そのものの意味を、志を果たそうとする過程そのものの崇高さと意味を、見つめているように今の私には思われる。

古来、中国や日本の文人にとって『史記』は自らの人生を重ね合わせる人物像の源泉となってきたが、陶淵明もその例にもれず、例えば伯夷と叔斉に度々言及する。「積善には報い有りと云うに　夷叔は西山に在り　善悪苟くも応ぜずんば　何事ぞ空言を立てし」(「飲酒　其二」)などは、首陽山で餓死した伯夷と叔斉について、司馬遷が自らの悲運と重ね合わせた「天道は是か非か」(『史記』「伯夷列伝」)という慨嘆に通じるものであろう。しかし次の言は、慨嘆を通り越して、古来自明とされてきた世界観への明白な

疑問視と、古代の聖王の言は事実と明らかに矛盾し間違いではないか、という大胆で挑戦的な告発と言えないであろうか。

承前王之清誨　前王の清誨を承く
曰天道之無親　曰く「天道に親無し」
澄得一以作鑒　澄みたるものは一を得て以て鑒と作り
恆輔善而佑仁　恒に善を輔けて仁を佑くと
夷投老以長飢　夷は老に投って以て長飢し
回早夭而又貧　回は早く夭して又貧なりき
傷請車以備槨　車を請うて以て槨を備えしを傷み
悲茹薇而殞身　薇を茹うて身を殞せしを悲しむ
雖好學與行義　好学と行義とありと雖も
何死生之苦辛　何ぞ死生の苦辛なる
疑報德之若茲　徳に報ゆるの茲の若くなるを疑い
懼斯言之虛陳　斯の言の虛しく陳べられしかと懼る

（「感士不遇賦」より）

しかし陶淵明は別の詩の中で、この不条理に耐えるからこそ、その人間性が後世に伝えられるのだとも述べる。「固窮の節に頼らずんば　百世当に誰をか伝うべき」（「飲酒　其二」）。「固窮節」とは『論語』「衛

霊公」篇に見える「子曰、君子固窮。小人窮斯濫矣。」に由来し、いかに困窮してもあくまで節を曲げぬ精神の意であり、陶淵明の詩に頻用される語である。

ただ私は今でこそ「固窮節」をうたう哲学的な詩に、歴史学者としての人生を重ね合わせて共感するところがあっても、当時は自然美をも詠み込んだ詩の方に、より惹かれていた事を告白しなければならない。陶淵明の詩にうたわれる事がなかったなら、西洋文学を彩るかぐわしい薔薇や、古今集や新古今集に妖艶な美を添える桜花に当然のように惹かれていた少女が、抑えた大人の気品を漂わせる松や、菊や、蘭を慕わしく思う様にはならなかったであろう。(九) 地下鉄千石駅と三田駅の間の通学中の二十分は、束縛の多いミッション・スクールに通っていた私にとって、陶淵明の詩にうたわれたひそやかな自然美に没頭して、魂の飛翔を感ずる事のできる至福の時間であった。地下鉄の中で夢中で暗唱した「飲酒」二十首の中の次の一篇なども、その日々を鮮やかによみがえらせる。

栖栖失羣鳥　栖栖(せいせい)たり　失群の鳥
日暮猶獨飛　日暮れて猶お独り飛ぶ
徘徊無定止　徘徊して定止無く
夜夜聲轉悲　夜夜　声は転た悲しむ
厲響思清遠　厲響(れいきょう)　清遠を思い
去來何依依　去来　何ぞ依依たる
因値孤生松　孤生の松に値(あ)えるに因り

斂翮遙來歸　翮（つばさ）を斂（おさ）めて遥かに来り帰る
勁風無榮木　勁風に栄木無きも
此蔭獨不衰　此の蔭は独り衰えず
託身已得所　身を託するに已に所を得たり
千載不相違　千載　相違わざれ

（「飲酒　其四」）

「歸去來辭」にも「孤松を撫でて盤桓す」とあるように、陶淵明は「孤松」を愛した。常に濃緑の葉を持ち節を曲げぬ松に自らの理想を見、その葉陰に寄り添う鳥に自身をなぞらえた右の詩には、悲壮な情熱を抑えた格調高さがある。私は「歸去來辭」や右の詩をきっかけに、松の幹や葉陰の美しさを見直すに至ったのであった。次は当時の私が最も愛した詩の一つであるが、秋の夕暮れに山から降りる冷気を帯びた澄んだ大気と薄暮の中で、籬に香る菊を彷彿とさせ、古来日本の文人にもこよなく愛されてきた一篇である。

結廬在人境　廬を結びて人境に在り
而無車馬喧　而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　君に問う　何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏　心遠ければ地も自から偏なり
採菊東籬下　菊を採る　東籬の下
悠然見南山　悠然として南山を見る

山氣日夕佳　山気　日夕に佳く
飛鳥相與還　飛鳥　相与に還る
此中有眞意　此の中に真意有り
欲辨已忘言　弁ぜんと欲して已に言を忘る

（「飲酒　其五」）

秋の露を帶びた菊の花びらは、詩人の酒に浮かべられて一層色が冴える。

秋菊有佳色　秋菊　佳色有り
裛露掇其英　露に裛れたる其の英を掇み
汎此忘憂物　此の忘憂の物に汎かべて
遠我遺世情　我が世を遺るるの情を遠くす
一觴雖獨進　一觴　独り進むと雖も
杯盡壺自傾　杯尽きて壺自から傾く
日入羣動息　日入りて群動息み
歸鳥趨林鳴　帰鳥　林に趨きて鳴く
嘯傲東軒下　嘯傲す　東軒の下
聊復得此生　聊か復た此の生を得たり

（「飲酒　其七」）

この詩の冒頭の四行には、隠遁者の枯れた心境を認めるのが一般的な解釈なのかも知れない。少女の頃の私もそのように単純に理解していた。しかし今の私の解釈は異なるのである。詩人自身の枯れた外見に秘められた内なる情念が、この四行にほの見えるばかりではない。グラスになみなみとつがれたワインに月光がゆらめくような「葡萄美酒夜光杯(十)」の抒情、この詩人が世を去ってから数百年後に押し寄せ、砕け、奔流となってほとばしる盛唐のロマンの濫觴を私はここに見る。それはあながち後世の読者の、すぎたる思い入れとは言い切れないであろう。哀切の中に入り混じる抑えがたい甘美は、別の詩句にも流露しているからである。「白日西の阿に淪み　素月東の嶺に出づ　遙遙として万里に輝き　蕩蕩たり空中の景」「杯を揮して孤影に勧む　日月人を擲てて去り　志あるも騁するを獲ず　此れを念いて悲悽を懐き　暁に終るまで静かなる能わず」(「雑詩　其二」)。

先の「飲酒　其五」と「飲酒　其七」はいずれも菊をうたっているが、後者には憂愁を含んだ浪漫が漂うのに対し、前者には明澄な静けさがある。前者にたたえられた調和と静謐、魂の平和を、若き日の私は深く愛した。いかに心が乱れていても、この詩で私は深い平和に満たされたのであった。その平和は、今は失われている。

次の詩も孤高の志を松にたとえつつ、無常の闇を見つめる。

青　松　在　東　園　　青松　東園に在り
衆　草　没　其　姿　　衆草　其の姿を没す

凝霜殄異類　凝霜の異類を殄(つ)くすとき
卓然見高枝　卓然として高枝を見(あら)わす
連林人不覺　林に連なるときは人覚(さと)らず
獨樹衆乃奇　独樹にして衆乃ち奇とす
提壺挂寒柯　提げたる壺を寒柯に挂(か)け
遠望時復爲　遠望を時に復た為す
吾生夢幻間　吾が生は夢幻の間
何事紲塵羈　何事ぞ塵羈に紲(つな)がる

（「飲酒　其八」）

この詩と同じく孤高の志をうたっているが、映像的な美しさ故に、当時の私がより惹かれていたのが「飲酒　其十七」である。「幽蘭前庭に生じ　薫りを含んで清風を待つ　清風脱然として至らば　蕭艾(しょうがい)の中より別たれん」――冒頭四行のこの控えめな格調は、心の中でつぶやく度に、露を含んだ風に揺れる高貴で香り高い蘭を胸に思い起こさせ、平らかならぬその後の学究生活の折々を、いかに支えてくれたことであろう。

陶淵明の異色の作品として知られる「桃花源記」は、晋の太元年間の物語として描かれる。漁師が谷川に沿って船を漕ぐうちに両岸に桃花林が広がっている場所に出て、あまりにかぐわしく美しいので、水源

を訪ねると、一つの山に出、その山の小さな口から光が差しているのを見て、そこから入ると平和な世界が広がっていた。いわゆる桃源郷であるが、秦代の戦乱を避けてここに来た人々が住んでおり、その後の漢代や魏・晋も知らないという。漁師は彼らの知らない後代の話をしてやり、数日逗留して帰ったのだが、別れ際に人々は漁師に外界の人に話してはならないと示唆した。しかし漁師はあちらこちらに目印を付けながら戻ると太守にその話をし、「太守即ち人を遣して其の往くに随い、向に誌せし所を尋ねしむるも、遂に迷いて復た路を得ず」という結末となったのである。その後も「高尚の士」がその地を探し当てようとしたが、病を得て果たす事ができなかった。

この作品は、哲学的詩風をたたえる陶淵明の作品としては珍しい説話的文章であると思われている。道教的な理想を抱く詩人であるから、隠遁への憧憬の要素は勿論あるに違いない。しかし、それだけではなかったのではないか、というのが今の私の思いである。それは、「桃花源記」に「中に雑樹無く、芳華鮮美にして、落英繽紛たり」とうたわれている桃花の林を、私自身がかつて自由に訪れた覚えがあるからである。あでやかに咲き誇り、絶え間なく散り敷く桃の花の道をたどって、至福の園へ幾度も通った覚えがあるからである。その園に無限に広がる文学は私の喜びであり、陽光の中の未来に疑問はなく、そこに来さえすれば私はいつも幸せであったのである。

しかし今、伊豆の蝉しぐれの中で幾度も浸ったその至福に、どうしたわけなのか今の私は戻れない。その後文学を離れて歴史や政治外交に職業としての関心が移ったからなのか、その心の移ろいへの因果応報なのか、あれほど慣れ親しんだ道であるにもかかわらず、今の私はその道があるはずの場所に佇むばかり

である。

その場所の風景は今でも変わっていない。しかし道はどこにも見当たらない。かつてあれほど心ときめくばかりに若い私を至福の園に誘った桃の花が、かつてと変わらず咲きこぼれながら、今は私に対して沈黙するばかりである。物言わず、ただはらはらと花びらを落としながら、美しく、しかしむなしく、ひたすらどこまでも咲きわたるばかりである。

桃源郷には二度と戻れなかったという陶淵明の「桃花源記」は、一見他愛のない説話に見えながら、中央から「一たび去りて」後の後半生の思いを凝縮したものではなかったのだろうか。自分の中で失われた内面の幸せが、またそれを感じ得た日々が、二度と戻らないことへの限りない哀惜ではなかったのだろうか。

八月の光が薄れても、めぐりくる夏を信じた日々には幾度もたどれたその道を、今の私もまた、見失っている。

重雲蔽白日　重なれる雲は白日を蔽い
閒雨紛微微　閑かなる雨は紛として微微たり
流目視西園　目を流して西園を視れば
曄曄榮紫葵　曄曄として紫葵栄ゆ
於今甚可愛　今に於て甚だ愛す可きも

奈何當復衰　当に復た衰うべきを奈何せん
感物願及時　物に感じて時に及ばんと願うも
毎恨靡所揮　毎に恨む　揮う所靡きを
悠悠待秋稼　悠悠　秋稼を待ちしも
寥落將賒遲　寥落　将に賒遲ならんとす
逸想不可淹　逸想　淹む可からず
猖狂獨長悲　猖狂　独り長く悲しむ（十一）

（一）冒頭のこの詩は陶淵明の「王撫軍の座に於て客を送る」の後半であり、この三月で本学を去られる先生方への感謝をこめたお別れの言葉として引用したものである。中でも私の研究室の向かい側の研究室におられた岩本憲司先生には、ご蔵書として大切にしておられる『四庫全書』などの漢籍を拝見させて頂いた事もあった。なお本稿における陶淵明の詩文は全て、松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』（上）（下）、岩波文庫、一九九一年に拠った。但し書き下し文については、一海知義訳注の後掲テキスト（筆者暗唱）に従い、改変した箇所がある。また本稿は陶淵明の全作品のうち、筆者の心の琴線に触れた詩の一部を取り上げている主観的な文章であり、陶淵明の主要な作品として知られるもの（「歸去來辭」や「五柳先生傳」など）を必ずしも取り上げていない事をお断りしたい。

（二）日本近世史の尾藤正英氏は、荻生徂徠が流罪の身となっていた父の赦免に伴って江戸へ帰ったのが『徂徠集』などによると二十五歳の時であったとされているのに、『政談』では十三年間田舎にいたと書かれていて記述に齟齬があると指摘し、しかも徂徠自身が何度も二十五歳と明記している点が不審であると述べている（尾藤正英「国家主義の祖型としての徂徠」『日本の名著16　荻生徂徠』中央公論社、一九七四年所収。尾藤正英抄訳『政談』講談社学術文庫、二〇一三年に再収録、二七三頁）。以下は推測にすぎないが、徂徠が「十三年」と矛盾した年数を『政談』に記しているのは、記憶違いなどではなく、陶淵明の詩中の「一去十三年」を意識したからではないか。そうであるとすれば、「十三年」は文学的な修辞という事になる。

（三）一海知義訳注『陶淵明』（中国詩人選集4）、岩波書店、一九五八年。

（四）星川清孝訳注『古文真宝』（前集上・下、後集）、明治書院、一九六七年。後集の巻之一の冒頭に漢武帝の「秋風辭」があり、読む度にこの書物を初めて手に取った時の事が心によみがえる。

（五）陶淵明は歴史上の人物に託して、自らが俗塵にまみれた官界を去った経緯を処々に記している。一例として、「張生は一たび仕えしも　曾て事を以て還る　我が能わざるを顧みて　高く人間を謝す」（「扇上畫贊」）。

（六）Okakura Kakuzo, *The Book of Tea*, New York: Fox Duffield & Company, 1906. 岡倉天心著、桶谷秀昭訳『茶の本』講談社学術文庫、二〇〇七年。

（七）原文表記は、麻生磯次著『奥の細道講読』明治書院、一九七六年、二六四～二六五頁に拠る。

（八）白文表記は、田中謙二・一海知義著『史記』（上）、朝日選書、一九九六年、四〇二頁に拠る。書き下し文には多少の改変を加えた箇所がある。

（九）「秋風辭」にも「蘭有秀兮菊有芳。懷佳人兮不能忘。」とある。

（十）「葡萄美酒夜光杯　欲飲琵琶馬上催　酔臥沙場君莫笑　古来征戦幾人回」（王翰「涼州詞」）。

（十一）陶淵明「和胡西曹示顧賊曹（胡西曹に和し、顧賊曹に示す）」の後半部分。三十九歳（四〇三年）頃の作とされる。